

# PROPOSAL

## 地域だからできること…共に生きる文化でまちづくり・人づくり、そして未来づくりへ

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団  
横浜市磯子区民文化センター杉田劇場

館長 中村 牧

文化施設を運営するということは、その町の、人と文化を知ることから始まります。

地域にはそれぞれ顔があり、日々の営みの中には、文化があります。

文化で輝く人を増やして、地域に新たな輝きが生まれ、地域の誇りや輝きが、新たな文化を、未来を、生み出します。

地域に根差すために、奮闘してきた内容を一部ですが、ご紹介します。

### ○初めての地域まわり

施設開館前（2004年10月）の地域廻り・あいさつ廻りで、先制パンチ。行政の都合で作った公共文化施設はいらない。海を埋め立てられた町だから、海を返してほしい、海の代わりにプー

ルをつくるんじゃないのか、よそ者、女は帰れという強烈なお声を、地元有力者からいただきました。その時に初めて、地元で地域に杉田劇場が愛されなければ、成り立たない、何をやってもうまくいかないと気づくことができ、地域に根差した劇場運営を本気で取り組むきっかけになりました。それ以来、地域に足を運び、杉田劇場という名を世に出すことに繋がりました。

### ○杉田劇場と美空ひばり

磯子区民文化センターを設置するにあたり、横浜市磯子区が区民に愛称を公募して決まった名称が、杉田劇場。昭和21年1月1日に、当時、市電の終着地であった杉田に、開館した杉田劇



中村 牧  
(なかむら まき)  
横浜国立大学教育学部  
音楽専攻卒業。日本クラシック音楽マネジ  
メント協会(現:一般社団  
法人日本クラシック音  
楽事業協会)の社団化・立ち上げに従事、  
その後、横浜みなとみらいホールや指定  
管理施設第1号となった杉田劇場の立ち  
上げに携わり、2006年同劇場館長。横  
濱みなとみらいホール総支配人を経て  
2014年4月より現職。



まだ、このころは、はつきりしていませんでした。杉田劇場をオープンするにあたり、杉田劇場のことをもつ

場（芝居小屋・昭和25年閉館）は、戦争中のかまぼこ兵舎を払い下げてもらったことで、唯一の娯楽として、多くの人が訪れた劇場。歌舞伎役者や有名な役者も多く出演し、子供のころに観劇に行っていた区民が懐かしく思い、この名を残したいという要望が強かったため、愛称の決め手になりました。杉田劇場と美空ひばりの関係は、

と知りたいという思いから、当時を知る人を探し訪ね、旧杉田劇場の経営者の甥、片山茂氏（当時81歳）にたどり着き、話を聞くことになりました。そこで、滝頭（磯子区）の魚屋の加藤和江（美空ひばり）ちゃんがお母さんに連れられて、幕間で歌いに来ていた話を聞き、地元新聞社の記者と当時の資料を再調査し、初舞台が杉田劇場であるということを確認し、杉田劇場お披露目のビックニュースとして、記者発表をしました。美空ひばりさんが昭和の歌姫として、日本中で有名になった裏側で、そつと心の中にしまい込んでいた真実を結果的に全面に押し出すことになり、ひばりさんが初舞台を踏んだ劇場として、メディアにとりあげられ、年表も書き換えられました。いそご、わが町、おらが町から有名人を輩出したという話題性が功を打って、地域の誇らしげな顔が、あちこちで垣間見ることができました。

### ○指定管理者としての劇場運営が正式にスタート

2005年2月5日にオープンした横浜市磯子区民文化センター杉田劇場。

国の政策（構造改革）の一環で、公共施設を地方公共団体や財団が直営するのではなく、民活の手法を入れようという指定管理者制度が、公共文化施設にも導入され、プロポーザル形式（競争入札）で勝ち取った全国で最初の公共文化施設だったため、全国の注目を浴びました。5年ごとの指定管理者期間の始まりです。ただし、この指定管理者制度は、5年先が見えないことで、職員の雇用不安や文化の支援やサービスを享受する住民側にも負担を強いていること、地域の文化拠点としての長期的な文化振興ビジョンを打ち出せないことなど大きな問題を常に抱えています。これを解決する糸口は全国の指定管理者が悩み、模索中。全国の指定管理者が決起するか、政治を動かすこと、の力（住民の力、地域の力）をお借りして制度の見直しをしてもらえ、ことを願いつつ…。

### ○5つの運営方針と各期のテーマ

5つの運営方針は、「つどう」「そだてる」「ささえる」「つなげる」「ひろげる」

この5つを循環することで、地域の文化の土壌を育み、種を蒔くことで、人と人との絆が生まれ、地域のコミュニティが育ち、人も街も豊かになっていくことを目指してきました。

〈各期のテーマ〉

第1期 2005年2月～2010年3月 市民協働

第2期 2010年4月～2015年3月 文化でまちの賑わいづくり

第3期 2015年4月～2020年3月 伝承文化で人づくり

第4期 2020年4月～社会包摂、文化的コモンズ

### ○地域に飛び込んで

この町には、どんな人が住んでいるのか、どんな町なんだろう？

地域に住む人たちが、どんな生活をしているのか、そこにどんな文化が息づいているのか、文化施設に来る人たちが、私たちのお客様。そのお客様のことを知ることが最初の仕事です。

地域にはいろいろな人が住んでいます。文化施設が好きだという人は、何が好きで、何を望んでいるのか、文化施設に興味・関心がないという人たち

は、何に興味があるのか。「文化なんて、敷居が高い、文化施設は気恥ずかしくていかれない」という人たちには、文化の持つ権威的なイメージを払拭してもらいたい。おしゃべりだって、スポーツだって、食だってすべて文化だということに気づいてもらいたい。地域に住む人たちの日々の営みが文化であり、すべての人が持っているものなんだと気づいてもらいたいと、私たちは地域のあらゆるところに飛び込んでいきます。

### ○文化でつなぐ地域

地域の顔が見える、町内会や子供会、神社の祭礼や夏祭り、保育園、幼稚園、小学校、中学校、介護施設、障がい者施設、商店街、町工場などに出かけ、文化でお手伝いできることは何かを尋ねてきました。文化の御用聞きです。

この御用聞きを重ねた結果、文化施設という枠を超えて、文化が人をつなぎ、地域をつなぎ、街をつなぎ、杉田劇場は、地域の中で動き出しました。

地元の事業会、工業会のようなところは、地元のアーティストでアトラクション・イベントをしてくれる人を求めるので、地元のアーティストたちを

紹介します。文化の人材バンクのようなものです。

### ○文化でつなぐ学校

小・中学校校長会に働きかけて、児童・生徒へのアウトリーチにとどまらず、地域に開かれた学校にしたいという学校側の願いを聞き、歌声プロジェクト（全校生徒の歌声を体育館で劇場のスタッフが録音し、商店街に流す）を仕掛け、商店街に元気な子供の歌声が流れることで、商店街に活気が生まれ、行き交う人が流れてくる音楽に子供の姿を目に浮かべる温かな地域でしか生まれえない文化の光景があります。ただ、今年は、コロナ禍で学校に行って録音するというスタイルは休止中ですが、録音を杉田劇場で行う形で、プロジェクトを一部変更して、2年間、コロナで部活動ができなくなった合唱部員の歌声を思い出作りとして、録音し、その歌声がコンクールで入賞を果たし、そのことが、街に学校に活気を取り戻すことに繋がりました。

### ○文化でつなぐ商店街と学校

学校と連携するためには、教員と仲良

くなること。教員との距離を縮めたいと考え、教員向けに文化体験や文化研修メニューを提案し、教員と劇場スタッフが交流を深めるきっかけづくりになっています。その延長線上に、商店街と学校をつなぐためにつくった緩やかな会があり、メンバーは、中学校教員、小学校教員、校長、保護者、商店街、区長、劇場、地域施設職員など。地元小中学校出身の競歩の選手（松永大輔）がリオ・オリンピックに出るという話が盛り上がり、その会が主宰して、2016年のリオ・オリンピックのパブリックビューイングを夜中の12時から朝の5時半まで、杉田劇場を使って開催しました。もちろん、前代未聞のこと。オリンピック委員会との調整も大変なものでしたが、深夜から公共文化施設を開けて、町内会のお年寄りまで、朝まで観戦。深夜の観戦は、行政も町内会も学校も商店街も劇場も政治家もノーサイド、不思議な一体感が生まれ、



わが町を誇りに思う人たちがまた増えた瞬間でした。

### ○文化でつなぐ組織

文化という合言葉で、組織をつないでいきます。地域の力と文化の力が、縦割りの行政をつなげます。文化行政は、地域振興課とか、文化課とかが地域の文化の担当し、それ以外はなかなか通じないことが常ですが、私たちがいる磯子区では、町内会や学校、地域、政治家までもが味方になってくれるので、文化とは無関係のような土木事務所にも、文化活動でつながっています。土木事務所は道路を管理していますが、道の日のイベントに、文化的な要素を入れ、たら、地域住民は喜ぶよとお声をかけ、集客やイベントのお手伝いをします。地域の人が参加しやすいようにするためには、地域の人が参加している杉田劇場のオリジナルチームである杉劇リコーダーず、杉劇☆歌劇団を派遣し、文化で地域の課題を解決していきます。

### ○文化で自立するチーム

区民企画アイデア募集から生まれた「杉劇リコーダーず」は、2006年7

月に結成しました。8歳から87歳まで、50名強の区民中心の異世代交流リコーダーアンサンブルのチームです。団員の中で、楽譜を作る人、各パートのとりまとめをする人、自主練習を指導する人、子どもたちに指導する人など、自主的に役割を持ち、常に新しい目標（出演の機会）に向かって、自立的に活動しています。NPO化も視野に入れていきます。磯子の親善大使として、これまでも杉田劇場を中心とした演奏活動の他、地域でのアウトリーチ、他都市との交流、気仙沼復興支援のための活動等を行っています。また、子どもたちメンバーは小学校3年生の音楽の教科書にも取り上げられました。



### ○文化でつなぐ人

地域を歩きながら、地域の文化を探しながら、人と出会い、その人の生き方、文化に触れて、その人の手によって明かされる地域にしかない魅力を見する、いそご文化資源発掘隊という事業を行っています。これは、地域だからこそのことができること。郷土愛があり、地域を誇りに思う人がいて、その思いを、より多くの人に知ってもらうために、人が財産の事業です。

### ○文化でつなぐ区民の声、区民が自主的に運営する仕組みづくり

公共文化施設は、そこに住む住民のための施設。そこに住む人たちの声、区民の声を反映できる仕組みをつくるということ、受け皿区民企画委員をつくり、区民自らが収支トントンで作る企画を実践したり、区民のボランティア組織杉劇@助っ人隊を立ち上げたり、区民とともに歩むためにNPO法人チーム杉劇を立ち上げました。コロナ禍であっても、区民は元気で、文化支援や文化活動を求めている、それに応えることができるように、助成金をとって、ハード面の環境整備をし

てきました。また、地元劇団や地元発のバンドサークル、海外アーティストを多く友に持つ地元アーティストなどは、力強い劇場の応援団であり、杉田劇場オリジナルの団体である杉劇☆歌劇団や杉劇リコーダーズとともに、地域の顔であり、地域にファンがたくさんいます。地域のニーズを、地域の声を拾い上げてくれています。

### ○文化で地域の課題解決

杉劇リコーダーズには、視覚障害の方が参加しています。楽譜はもろろん読めないけれど、チームが手足となって支えて、耳で音をとり、美しい音色を奏でるチームの一員です。杉劇☆歌劇団にはダウン症のこどもたちも一緒に参加して芝居作りをしています。

地域の文化施設を運営することは、地域の一員として、さまざまな地域の課題解決を地域とともに共有していきます。昨今は、高齢者や生活困窮者の居場所の一つとして、こどもたちの居場所の一つとして、地域から協力を求められます。文化施設がそこまでやるのかと思うかもしれませんが、文化だからこそできること、文化の力をあら

ゆるる人に知ってもらう機会でもあると思っています。文化の力は、地域に住む人たちの力でもあるのです。あらゆる人を巻き込み、ステークホルダーを取り込んでいけるのは文化の懐の広さ。コロナ禍がだいたい収束してきた中で、この動きは加速していきます。

そして、これから…

### ○文化でつながる人々共に生きる

地域にはあらゆる人が住んでいます。障害がある人もない人も、外国にルーツを持つ人も、高齢者も、こどもも、分けてなく、障がいのある人も健常者も、共につどい、共に育ち、共に支え合い、共につながり、共に広がる世界、社会にするために、新たな仕組みを作っていきます。誰もが笑顔あふれる場として、未来を共に生きるために、文化で、あらゆる人をつないでいく先に、また、新しい文化が生まれると確信しています。



## 『社会基盤としての社会教育再考』

社会教育の再設計：シーズン1～未来への羅針盤をつくる知の冒険～

編著「学びのクリエイターになる！」実行委員会 2020年12月 新書判 160頁  
送料180円 定価880円（本体800円＋税） ISBN 978-4-7937-0140-5

### 社会基盤としての 社会教育再考

社会教育の再設計：シーズン1  
～未来への羅針盤をつくる知の冒険～

寺脇 研  
山崎 亮  
小田切徳美  
吉田博彦  
牧野 篤

日本青年館新書  
社会教育の再設計シリーズ・1

ご注文は書店または直接日本青年館まで（一財）日本青年館「社会教育」編集部 読者サービスセンター  
〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4-1 TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9026 社会教育webで検索